

奈良時代における孟子受容に関する一考察

－『日本書紀』を中心に－

北京外国語大学 北京日本学研究センター 講師
潘 蕾

「孔孟の教え」という言い方が示しているように、儒学では孟子は孔子に次ぐ重要な儒家として尊ばれている。中国の戦国時代を生きた孟子の思想は、儒家の祖である孔子の思想を受け継いで発展させたものであり、中国後世の政治・経済・文化に多大な影響を及ぼした。孟子の思想は『孟子』という書物に集約されているが、寛平三（891）年ごろに成立した『日本国見在書目録』には「孟子十四齊卿孟軻撰趙岐注、孟子七陸善経注」という記載があり、この記載から、遅くとも平安時代中期までに『孟子』はすでに日本に伝わったことが伺える。とはいえ、『孟子』が読まれた記録が平安時代中期までの史料には見られず、管見の限り、平安時代末期の公卿・藤原頼長の日記『台記』に『孟子』が読まれた最初の記録が残されている。つまり、『台記』の康治二年九月二十九日条に、藤原頼長の保延二（1136）年から康治二（1143）年までの読書目録が記されており、その中に「孟子十四卷、首付、永治元年」とある。

『孟子』が儒学の経典として広く日本人に読まれるようになったのは江戸時代に入ってからとされる。中国明末の文人・謝肇淛がその著『五雜俎』の卷四地部二に「倭奴亦重儒書，信仏法。凡中国経書，皆以重価購之，独無『孟子』。云，『有携其書往者，舟輒覆溺。』此亦一奇事也。」という言い伝えを記録している。『孟子』を載せた船が日本に着く前に必ず沈没するという言い伝えは、孟子の思想が日本人に受容されるどころか、排除されていたことを物語っている。このような言い伝えが生まれる背景として、孟子の説く「湯武放伐」の思想は、日本の政治体制がいかに変化しても皇室がずっと政治体制の頂点にいるという思想と矛盾していることが挙げられている。

しかし、孟子の思想に対する忌避は古くからあったものではないと思われる。井上順理氏はその著『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』（風間書房、1972）において、『孟子』の書が少なくとも奈良時代の初期ごろまでにすでに日本に伝わり、しかも、中世までに関する限り、日本人の孟子に対する批判ないし忌避の痕跡が全く見られないと指摘した。筆者が日本に伝存する最古の正史『日本書紀』を読んだ際も、その中に孟子思想の要素が見え隠れしていることに気づいた。よって、本稿では、『日本書紀』の記事を細かく検討することを通じて、奈良時代において、孟子の思想が受容されたのか、もし受容されたならいかなる形で受容されたのかについて考えてみたいと思う。